

くこととなりました。近年、脳血管内手術や神経内視鏡といった新しい技術の進歩も目覚ましく、脳外科領域の専門分野毎での高度化が進んでおり、個々の脳外科医がその全てに精通するのは困難になりつつあります。熊本大学病院においては基礎・臨床研究を基盤とし、こうした脳外科分野の最先端で高度な医療に責任を持ちつつ発展させると共に、県内隅々まで脳外科診療が行き届くような体制を整備するよう人材育成を含めた努力を継続して参りたいと思っております、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

### 熊本大学大学院生命科学研究部 小児外科学・移植外科学 分野教授就任のご挨拶



大学院生命科学研究部  
小児外科学・移植外科学  
分野教授  
日比 泰造

二〇一七年十月一日より熊本大学大学院生命科学研究部小児外科学・移植外科学分野の第三代教授を拝命いたしました。医育寮「再春館」を源流とする、輝かしい伝統と歴史を誇る熊本大学医学部において外科学の未来を拓く僥倖に恵まれ、心から深く感謝申し上げます。

切除困難かつ予後不良な肝胆膵領域のがんと対峙すべく、私は外科医を志しま

した。一九九八年に慶應義塾大学を卒業後、横須賀米海軍病院、慶應義塾大学病院での研修を経て、国立がんセンター中央病院でレジデント、続いてがん専門修練医として当時国内最多となる年間二五〇件以上の肝・膵切除すべてに携わり、世界を先導する日本の肝胆膵外科の精緻な手術を徹底的に学びました。

その後、非代償性肝硬変合併の肝細胞癌に対する唯一の治療手段である肝移植手術を自分で遂行できるようになりたい、母校の慶應義塾大学に戻りました。初めて担当したレシピアントを救命できず、途轍もない無力感に苛まれる中でご本人の無念を何としても晴らす、と心に誓いました。臓器移植法改正と重なり日本での脳死移植の機運が高まり、世界最多の移植を行う米国での武者修業を決心し、全米のマッチングで Miami 大学に臨床フェローとして採用されました。ここでは年間五〇〇件近くの腹部臓器移植が行われ、多くの困難症例に加え小腸・多臓器移植の先駆けとしてよく知られ、様々な患者が全米や世界各国から送られてきます。幸い渡米当初から日本の肝胆膵・移植外科の偉大な先達のおかげで極めて高い評価を受け、肝・腎・膵・小腸・多臓器移植において多くの執刀機会を授かりました。

再び慶應義塾大学に戻り五年間、一般・消化器外科の肝胆膵・移植班に所属し「全方位戦略」を掲げ、腹腔鏡下胆嚢

摘出から肝移植、さらに他院・他国では切除困難・不能とされたがん患者に対する自家移植を含む超拡大切除まで様々な手術に取り組みました。この間、腹腔鏡下肝切除第二回国際コンセンサス会議の実務担当として、また日本人初の I L T S (国際肝移植学会) の Vanguard Committee 委員として世界の肝臓外科や肝移植のリーダーと知己を得る幸運に恵まれました。さらに日本肝胆膵外科学会主導の腹腔鏡下胆嚢の日韓台国際プロジェクトにも加わり、ありがたいご縁で外科医を志した時には想像し得なかった地平線に立ちました。

我々は小児外科と、成人・小児の肝移植を主体とした移植外科の両翼を担う世界でもまれな診療科です。初代教授の世良好史先生は小児の肝・胆道疾患と悪性腫瘍の治療を強力に推進し、胆道閉鎖症の患児をオーストラリアに渡航させ生体肝移植の世界初の成功に導き、新たな道を切り拓かれました。第二代教授の猪股裕紀洋先生は生体肝移植を確立した京都大学でのご経験を元に、二〇一七年時点で通算肝移植五〇〇件超の日本屈指の移植施設に育て上げました。

臓器移植の父である Sawai 博士は「医学の歴史は昨日までであり得なかったこと馬鹿げていると考えられていたことが今日、ようやく何とか達成できるようなになり、明日にはそれが標準治療になる、この繰り返しである」と喝破しています。

私は、ひとりの人間として患者・家族と向き合い、外科医・科学者として生命の深淵を覗き込むことを怖れず、真理を探究する academic surgeon であることを信条としています。我々は日本のみならず世界中の小児患者、そしてがんを含む様々な理由で末期臓器不全に陥った患者に最高の外科医療を届けることが使命です。

Socrates の「無知の知」、Newton が好んだ「巨人の肩の上に立つ」、そして小泉信三の「練習ハ不可能ヲ可能ニス」を肝に銘じ、火の国熊本の医療の発展に全力を尽くし、連帯を広げて理想の高みを目指してまいります。どうか末永くご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願ひ申し上げます。

### 熊本大学大学院生命科学研究部 生命倫理学分野教授就任のご挨拶



大学院生命科学研究部  
生命倫理学分野教授  
門岡 康弘

平成三十年四月一日に熊本大学大学院生命科学研究部生命倫理学分野教授に就任いたしました門岡康弘と申します。

私は平成十一年に熊本大学医学部を卒業し、当時の第一外科学講座に入局しま